

43	露字ニテ地名記入ノ日本図（皇朝輿地全図）（模写）		
	290.3-130		
	大黒屋光太夫がロシアから持ち帰った日本地図の模写。		

- ◆ 『北槎聞略』には光太夫がロシアから持ち帰った地図が付されている。このうち2葉の模写を当館では所蔵している。その一つ、『露字ニテ地名記入ノ日本図』は、17世紀の中頃にフランス人が製作した日本地図が原図といわれている。表題に「1786年 ロシア国人製」の記載があるところから、光太夫のロシア滞在中に作られたものと思われる。

本州・四国・九州（形は正確ではない。また、北海道は含まれていない）が薄い青（海）をバックに画面いっぱいに描かれている。各地の地名がロシア文字で記入されており、そのうちのいくつかには日本語が朱書きされている。

44	魯西亜国都ノ図（模写）		
	290.3-131		
	『露字ニテ地名記入ノ日本図』と同じ光太夫将来地図の模写。ペテルブルクの市街図が描かれている。		

- ◆ 光太夫は日本への帰国を願い出るために、ラックスマン（後にその息子が遣日使節として光太夫に同行して来日した）と、首都ペテルブルクを訪れ、数か月滞在した。この地で光太夫はエカテリーナ女帝に拝謁し、直接帰国の希望を伝えることができた。

川、緑地、建物等がそれぞれ色分けされている。両脇には光太夫の記憶による施設や建造物と思われる72か所の名称が、地図上に付した記号と対応させて記されている。

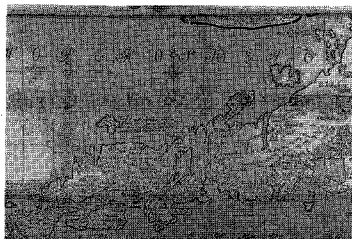
45	漂流民津太夫帰国航路世界図（模写）		
	290.3-131		
	仙台の津太夫らが遭難、ロシアに漂着した後、大西洋、太平洋を経て日本に戻ってきた航路を記入した世界地図。		

- ◆ 津太夫らの遭難は寛政5年(1793)、帰国は文化元年(1804)である。帰国の年は光太夫のその12年後にあたる。当時の蘭学者大槻玄沢と志村弘強は仙台藩命によって津太夫らから直接話を聞き、『環海異聞』としてまとめた。この序例附言に「本船日本渡海の海路、右の世界図中に、別に朱線を引き、日暦を記せり」とあり、本地図はその模写であろうと思われる。当時としては珍しいメルカトル図法による。

※ 43～45はいずれも木村芥舟（かいしゅう）（軍艦奉行。咸臨丸の司令官）の旧蔵資料。

<参考資料> 『初めて世界一周した日本人』（290.9-155）

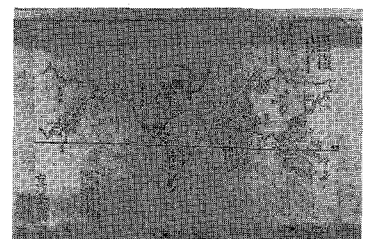
『環海異聞』（活字版）（218.1-23-4）



43 露字ニテ地名記入ノ日本図（模写・部分）



44 魯西亜国都ノ図（模写・部分）



45 漂流民津太夫帰国航路世界図（模写）